

# 陸地測量部沿革誌

全1巻・付録CD1枚 概要

## 関連図書のご案内

十五年戦争極秘資料集 補巻30 (復刻版)

外邦測量沿革史草稿 全4冊・別冊1

● 体裁 II A4判・4面付・上製・函入・

総1,310頁 (原本総5,216頁)

● 別冊II解説 (小林茂)・総目次

● 揃定価II本体113,000円+税

近隣アジア諸地域の地形図作製にむけて日清戦争を機に開始された陸軍参謀本部陸地測量部関係者の活動記録。近隣アジアにおける日本軍の戦時測量、秘密測量の実態を明らかにする資料である。

十五年戦争極秘資料集 補巻38 (復刻版)

研究蒐録 地図 全3冊

● 解説・総目次・執筆者索引付

● 体裁 II B5判・上製・函入・総1,580頁

● 解説 II 小林茂・渡辺理絵

● 揃定価II本体54,000円+税

陸地測量部の部内誌である本誌は、中国、東南アジア諸地域の測量事情を収載している。広範な地域に展開した測量部隊の活動を示す基礎資料である。

内山模型製図社発行 (昭和6、10年刊) (復刻版)

東京地籍図 全26巻・別冊1・付録9

● 体裁 II B5判 (地籍台帳)・A3判 (地籍図)・

上製

● 別冊II解説 (田中傑・中島直人・野村悦子・

初田香成)

● 付録II「地籍台帳」データCD

● 揃定価II本体510,000円+税

関東大震災により大被害を受けた東京の復興期の土地所有状況を網羅した貴重資料。近代都市・東京を解析するデータベースであり、地理学、経済・経営史、都市工学研究必携の史料である。

表示価格はすべて税別

# 陸地測量部沿革誌

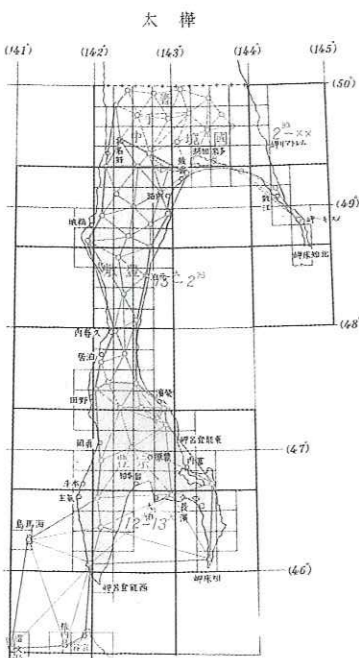
復刻版  
全1巻

付録CD1枚

明治から昭和戦前期まで、日本における  
地図製作を担っていた陸地測量部。  
その変遷と活動内容が詳細に綴られた沿革誌を復刻！

不二出版

## 一等三角測量図



「亞利比亞数字」ハ測量年度ニシテ大正  
昭和前期ニ大抵ノ字ヲ記シテノ年號ヲ示ス

- ◎ 体裁 A5判・上製本・函入・約570頁
- ◎ 付録CD 陸地測量部沿革誌附図・附表 37点
- ◎ 解説 小林茂 (大阪大学名誉教授)
- ◎ 価格 本体28,000円+税
- ◎ 刊行 2013年7月 ISBN978-4-8350-7411-5

陸地測量部は、一八八八（明治二一）年に陸軍参謀本部から測量局が分離独立して発足した機関で、明治期から終戦まで日本国内外の測量ならびに地図の製図と印刷を行っていた。その主な業務は戦後、地理調査所、さらに国土地理院に継承され、今日に至る。

『陸地測量部沿革誌』は大正一（一九一三）年発行の「第一編（第五編（正篇）」、昭和五（一九三〇）年発行の「終篇」、戦後の昭和二三（一九四八）年発行の「終末篇」と三期に分けて刊行された。陸地測量部の明治から昭和戦前期にわたる長期間の変遷、活動内容を示すほとんど唯一の書物といえるが、その主要部分は刊行されてからすでに九〇年以上が経過していることもあり、所蔵機関も少なく、全てを通覧するのは困難である。

陸地測量部は日本の近代測量史において中枢を担っていたにもかかわらず未解明な部分もまだ多い。また、学界だけでなく地図愛好者の間でも近代地図への関心が高まっており、その基本資料として、小林茂大阪大学名誉教授の解説を付し復刻するものである。

（不二出版）

復刻版『陸地測量部沿革誌』を推薦します

星埜由尚（日本測量協会副会長・元国土地理院院長）

明治維新後、明治新政府は、内務省及び陸軍に測量・地図の部局を設け、近代測量技術の導入と地形図の整備を図った。測量・地図作成機関は、その後の紆余曲折を経て、明治二一年には陸軍参謀本部陸地測量部に収斂する。この間、三角点の整備を順次図っていき、江戸幕府の国絵図、伊能忠敬の実測地図なども利用して国家の地形図なども整備していった。これらの測量・地図作成のために当時の国家予算の三分の一を当てたと言われている。現在の国の予算に占める国土地理院の予算と比べると、明治政府の測量・地図に対する力の入れ方がわかる。

私は、陸地測量部の後身である国土地理院に長く奉職した身であるが、近年の地図情報の革新とその利便性の増進には嬉しく思う反面、現代の我々がその便利さを享受している地図が当たり前のものになり、そこにどれだけだけの測量技術の背景があり、先人の苦勞があるのか、忘れられている面も多いことはまことに残念に思うのである。

『陸地測量部沿革誌』は、明治維新前後から大正九年に至る、陸軍参謀本部陸地測量部とその前身陸軍部局における測量・地図に係る制度、事業、技術などの変遷を辿っており、大正一一年に陸地測量部により発行されたものである。その後、大正一〇年から昭和三年までが「終篇」として、昭和四年以降一五年までが「終末篇」として増補されている。

この度、大阪大学名誉教授小林茂氏の解説により『陸地測量部沿革誌』が復刻され、戦前において測量・地図の軍事的な重要性があったとしても、国家が如何に測量・地図を重要視し、軍事機密とはいえ公開できるものは公開し、関東大震災における地殻変動を明らかにするなど、現在の国土地理院の業務に代表される測量・地図事業の源泉が陸地測量部にあることがよくわかるのである。それと同時に、外邦図など当時の国際情勢の影響も受けながら、諸外国に学び、外国からの研修生も受け入れ、新技術の導入にも励む技術者の姿も見えてくる。インターネットによるデジタル地図が隆盛の時代にこそ、先人の苦勞を知るべきであろう。江湖に広くお勧めする次第である。

緒言

當部ニ陸地測量部沿革誌ヲ編纂シテ附シテ附シタリ此間當部ノ業務ハ概ネ順調且好況ニ進歩シ創業以來期望セシ内地基本測量モ既ニ完成シ目下作業ノ主力ハ之ヲ極大ニ臺灣ニ指向中ナリ

思フニ是等事業沿革ノ跡ハ經年永キニ及フトキハ歴代遺跡ノ多ク又之ト相距ルコト久シクシテ敘述セントスレハ稍モズレハ取捨繁閑宜シキヲ得ヌ時トシテ先人ノ功業ヲ冒カスノ虞ナキヲ保シ難ク寧ロ速カニ毎歳記録シ年報トシテ上梓スルニ若カサルモノアリ今深ク此ニ鑑ミテ茲ニ前沿革誌敘事ニ關聯シテ大正十年ヨリ昭和三年ニ至ル間ニ於ケル當部業務ノ梗概ヲ記録シ當部沿革誌終篇トシテ刊行スルコトトセリ

關係各位幸ニ諒焉

昭和五年四月

陸地測量部長 石井英三

▲「終篇」序文より

陸地測量部沿革誌

第一編 維新前後ヨリ陸地測量部成立ニ至ル

一、維新前後

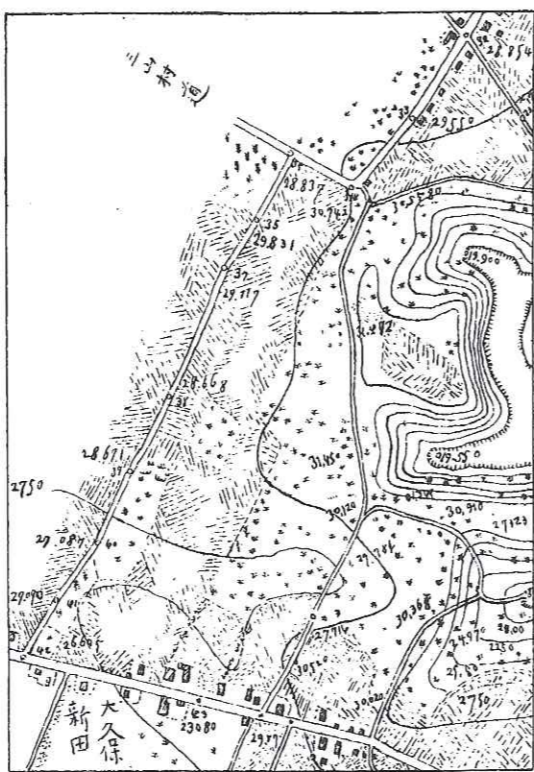
明治維新文藝大ニ勃興シ軍事ニ行政ニ興業ニ精進ナル地圖ノ需用倍々急ナリト雖モ當時一モ之ニ應スヘキモノナシ蓋シ往古ニ遡リテ之ヲ釋スレハ天平時代西曆七百三十四年頃既ニ僧行基ノ所製ト傳稱セラルル海道圖（第一圖）ヲモノアリ其後延暦年間ノ日本圖ナルモノアリ又天正十九年豊太閤諸國ニ命シテ各郡村ノ地圖ヲ作ラシメタル文祿圖ト稱スルモノ今尙ホ其斷片ノ存スルアリ降テ正保元年徳川幕府復タ諸國ニ命シ井上筑後守宮城越前守等ヲシテ之ニ執筆セシメ前後十一年ヲ費シ大成シタル「正保圖」現存六十八葉及元祿十年之ヲ重修シタル「元祿圖」等之ナキニアラスト雖モ要スルニ何レモ皆一種ノ繪畫タルニ過キス享保四年（西曆千七百十九年）建部賢弘幕命ニ依リ梯尺二万一千六百分一ノ日本全國圖ヲ作ル

維新前後

▲「第一編～第五編」本文より

圖四第 圖地式世近ノ初最

(部一ノ圖之方地南東原志習國統下)



明治八年測図

▲「第一編～第五編」附図より

昭和十年  
一月十二日  
地形科（第二次委員）職員樋口利明外三名に修技所生徒地形科課程一部の聴講を命ず。  
同日成績高等学校生徒二十三名當部を見学す。  
一月十六日  
三角科長岩倉工兵中佐湖地學及び地球物理学本邦委員を委嘱せらる（學術研究会議）  
一月十七日  
地形科長中島工兵中佐以下二十一名に陸地測量部特別任用技術委員を命ず。  
一月二十三日  
參謀本部の命令に依り関東軍測量隊に交付すべき機密地圖の副圖（版）は別令あるまで陸地測量部機密書類取扱並調整取扱規定第二十六条に依る外左記（略）の通り実施す。  
一月二十四日  
秘密圖中別紙（略）の通り圖名總標名並號数を改称す。  
一月二十六日  
舞鶴要港近傍秘密地圖區域を別圖（略）の通り擴張し又二十万分一帝國國宮津及五万分一地形圖「宮津町」を秘密地圖に編入す尚上記兩地圖中秘密區域を削除して出版す。  
同日自今普通地圖に編入せられたる地圖は左記（略）諸官に於て各圖書の区分に拠り其標度之を取極め品目の員數表を添布して部長に提出し閲覧後は之を材料主管に送付し同官は速に部機密書類取扱並調整取扱規定第二十四条第七項に準じ之を燒却するものとす。

▲「終末篇」本文より